巻頭特集

華やかながら素朴な風情漂う

市原土人形の魅力

長きにわたり、伝統的な市原土人形を夫婦二人三脚で守り続けた後藤家。中でも、市の無形文化財技術保持者に認定された三代目・故後藤久美さんの繊細で華やかな色彩とオリジナリティを追求した作風は、コレクターの間でも高い評価を集めています。市原土人形の魅力や歴史、久美さんの功績を妻の昭子さんに聞きました。

明治から始まった伝統ある市原土人形

瑞浪市域では、桃の節句に土製の雛人形を飾り、その周囲に天神や大黒天、歌舞伎役者などの人形を一緒に飾っていました。壊れた土雛は無病息災の願をかけて、飾り花とともに「お雛さま、お雛さま、また来年麦を見においでや」と唱え川に流す、流し雛の風習もありました。

この土人形を愛知県犬山市の制作者、野呂米次郎から仕入れ販売していたのが市原の伊藤只吉でした。明治20年代に入ると、自らの手で作りたいと米次郎に師事します。只吉の制作は未完に終わりますが、長女てる、次女そでが志を引き継ぎ、市原土人形の起こりとなりました。

やがて、農閑期の副業として農家で盛んに制作されるようになり、戦前のピーク時には、50軒以上が土人形づくりに携わっていました。「内裏雛（だいりびな）」に加え、歌舞伎や舞踊の登場人物や武者を題材にした「芸能もの」、七福神やお多福などの「縁起もの」、浦島太郎や金太郎など、お伽（とぎ）話から題材を得た「お伽もの」「十二支もの」などバラエティー豊かな人形がつくられ、最盛期には行商人の手により、長野県や滋賀県でも販売されていたそうです。

しかし、戦後、布製の高価な雛人形が普及すると、土人形づくりは次々に廃業。2008年に最後の継承者である後藤久美さんが亡くなると、「たたら」と「合わせ型」を用いた伝統的な技法の土人形づくりは途絶えてしまいました。

夫婦で守った伝統の灯 大きな反響を得た東京への出品

最後の継承者となった後藤家は、初代・与左衛門が1897年に土人形の制作を始めたとされています。1965年、二代目・久夫さんが他界し、当時、自転車店と農業を兼業していた久美さんが跡を継ぎました。「自転車店の傍らで型抜きして成形を行い、荷台に乗せて持ち帰っては焼成するといった日々でした。土人形だけでは食べていけないとわかっていて、苦労を承知で始めた生活です」と昭子さんは当時を振り返ります。

そんな折、東京の百貨店から物産展への出展依頼がありました。「ここで売れ残るようならば土人形づくりはやめよう」と心に決めた後藤夫妻。「会場へ向かうと自分たちの人形がどこにも見当たらない。驚いて百貨店の担当者に尋ねたところ『即日完売しました』と。これが続けるきっかけになりました」と昭子さんは笑います。

生前の後藤久美さん。型から出した土人形を成形したり、色付けを行っているところ

久美さんが描き残した色付け見本画。写真は「乙姫」

雛人形の顔部分は、乳鉢ですりガーゼでこした胡粉を8回も塗り重ねる丁寧な仕事が施されています。ほお紅にあたる色を先に塗り、その上から胡粉を重ねぼかすため上品で優しい印象に

久美さんの父、久夫さん作の「桃太郎」

昭和初期から戦前の間に何体かつくられたとみられる「ラケット君」。当時の風俗を題材にした土人形もつくられました。「ラケット君」は、瑞浪市陶磁資料館に保管されていた石こう型を元に、新たに型を起こし復刻され「ぎふ清流国体」ソフトテニス競技の優勝の副賞として贈られました

1 紋や着物の柄など詳細に資料をひも解き、それでも不明な点がある場合は大学教授など歴史に精通している人に教えを乞うこともあったそう。人形の端々から隙のない、繊細な仕事ぶりがうかがえます　2 土人形の型。写真は巴御前人形の型　3 客の要望から生まれた作品もありました。十二支に達磨を組み合わせたシリーズも、その一つ。このシリーズは毎年多い時でも10個程度しか制作されませんでした

後藤家では、田植えが終わってから白生地（きじ）づくりに取りかかるのが常でした。色付けは農作業がはじまる4月3日まで、膠（にかわ）が腐らない15℃以下の寒の内に限ります。真冬でも窓を開け放して作業にかかり、除夜の鐘を聞きながら仕事をするのは毎年のことだったそう。アクリル絵具で彩色すれば、作業ははるかに簡便。しかし久美さんは泥絵具にこだわり、色付けに不可欠な膠も京都から良質なものを取り寄せていました。「親が繋いできた文化、伝統を守る気持ちが強かったのでは」と昭子さんは話します。白生地の焼成と大まかな色づけは昭子さんも手伝いましたが、年間制作数は全盛時でも百数十体。全国から入る注文数の3分の1程度しかできませんでした。

「一刻者」後藤久美 瑞浪市の無形文化財保持者に

1972年、瑞浪市の無形文化財「市原土人形」技術保持者に認定された久美さん。自らの制作物を玩具ではなく、歴史民俗資料であり、作品であるという認識を徐々に強くし、1975年ごろから色付け見本画を手がけるようになります。1986年、体調を崩し自転車店を閉めた後は、より精力的に人形づくりに邁進。独自の作風を確立しました。

流し雛の風習が途絶え、土人形が常時飾られるものになると、久美さんは鑑賞に耐えうる繊細な色付けを施すように。従来の大まかな彩色と一線を画す華麗さに「土人形らしくない」と評する人もいました。また、一般的に下色を塗ってから着物の柄などの上絵をいれるところ、久美さんは泥絵具を剥げにくくするため、柄を描いてからその隙間を埋めるように下色を入れる工夫を凝らします。新たに十二支に達磨を合わせた土人形を制作したり、牛の角を型より大振りに成形し直すなど、唯一無二の造形性を発揮しました。

大量生産が可能な鋳込みではなく、自分が納得いくものを生み出そうと努めます。些細なはみ出しや滲（にじ）みも許さない、妥協のない仕事ぶりは、頑固で自分を曲げない一刻者の久美さんならでは。加えて、初回の注文は直に顔を合わせた客しか受け付けませんでした。遠方であっても、手紙や電話のみでやり取りすることを頑なに拒んだのは、丹精込めてつくり上げた土人形を嫁に出す、父の心境かもしれません。

きらびやかながら素朴な風情を漂わせ、気持ちにぱっと花を咲かせてくれるような市原土人形。その姿をこれからも大切に愛でていきたいものです。

11 自宅裏庭にある土人形を焼成していた窯。かつては、近所同士が共同で窯を持ち、共同のトラックで出荷していた時期もありました。そのシーズン初めて窯に火を入れる際は松の葉などで燻製をし、窯内を乾燥させます。窯炊きは昭子さんの役目でした

12「思いでの詰まった窯をあえて壊すことはない」と、いまでもその姿を見ることができます

13 久美さんが残した土人形型の多くは、瑞浪市陶磁資料館へ寄付しました。「今でも主人が亡くなったことを知らない人から、土人形の注文の電話が入ることもあります」と話す後藤昭子さん

文／江藤莅夏　写真／瑞浪市陶磁資料館提供、田中貴久　デザイン／forlife.design